

子供たちの発達と自分づくり（解説）

長田先生；それでは、「子供たちの発達と自分づくり」の表を見てください。（添付資料 3 http://www.kyorei.ed.jp/cn6/cn6_02/pg6_02_13.html 「子どもの発達の図」からもご覧いただけます）

表の横軸は年齢(月齢)を示しています。縦は、「人との関わり」「自分づくり」「言葉」「外界との関わり」、そして「身体の発達」となっています。子どもによって若干のずれはあるものの、必ずこの発達の仕組みを辿って成長していきます。

表の中の黒い太点線はシナプスの量の変化を表しています。中央線がシナプスの成人レベル。シナプスをご存知かと思いますが、神経細胞のニューロンとニューロンをつなぐ接点ですね。このグラフを見て分かる通り、1歳でシナプスの数はピークを迎えます。成人の1.5倍です。ネオテニーという戦略ですが、人間はどんな環境でもその環境に合わせて生きていける。脳はそう準備されている。そうした神経ネットワークを持っている。すごいですね、この時期が大切なのです。心地よい体験は心地よさが脳に刻み込まれ、嫌な体験も脳に刻まれます。2001年の世界子ども白書(ユニセフ)では「消すことのできない刻印」という記述がありますが、その時期に刻まれたシナプスネットワークは、なかなか消す事ができないというのです。「三つ子の魂百までも」という日本の諺と一致します。3歳までがいかに重要か」ということが強調されています。3歳児神話は神話とって良いほど、現代科学でも解明されていない人間の不思議さがたくさん隠れているという意味で、昔からの大切な教えと理解しておいた方が懸命でしょう。平成10年厚生白書では、当時の椋野美智子室長が「三歳児神話は神話にすぎない」と訴えましたが、これは明らかに思慮が浅いといわざるを得ません。母子関係が人間を信じることの基礎となります。ここでビデオを見てください。「

（ビデオスタート「シナプスの変化」）

（ビデオ）；シナプスは脳のネットワークの要です。脳情報のやり取りが多くなるほど、シナプスも多くなります。実際にシナプスの数を数えてみると、生後数ヶ月で急激に増加し、8ヶ月から12ヶ月には成人の1.5倍というピークを迎えます。刺激を受けるとシナプスは増え、使われないシナプスは消えていきます。使われるシナプスは、そのネットワークが強化されます。シナプスは最初の日を100%とすると、3日後には10%も減ります。しかしその内容は、もとあったシナプスは40%も減っていて、それを埋めるように新たに30%のシナプスが生まれているのです。

（ビデオストップ）

長田先生；いかに0~3歳の子供との関わりが大切であるか、脳の中のネットワーク力に影響を与えるかお分かりになるかと思いますが、使われないシナプスは解けてグリア細胞に吸収されます。この時期、外界から受ける刺激の大切さや、母親を中心とする親との関わりが、大きな影響を及ぼすのです。

さて、表に戻りましょう。5, 6歳の発達の特徴から説明して、最近の保育園での

子供たちの問題点を考えてみたいと思います。5, 6歳の子供たちはルールを使ってダイナミックに色々な活動をする事ができます。6歳の2段目「自分づくり」の最後に「ルールに従ったほうが、遊びがダイナミックになる」とありますが、こうした発達をとげます。この年齢では、よくサッカーゲームをしますが、敵ゴール、味方ゴールを理解しないで自分のチームのゴールにシュートなんかしたら大変です。仲間から非難を轟々と受けてしまいます(笑)。その上に四角で囲まれている項目がありますが、これはヴィゴツキーが指摘していることです。「自分自身を意味や価値の世界に従属させるようになる。」すごいですね。たった6歳でこの発達。

そのすぐ上に黒丸で印がしてありますが、「人との関わり」の区分です。「集団の話し合いで、イメージを膨らませる」とあります。言葉を通して他人と話し合いができ、集団でイメージを共有できるようになるのです。作戦を立てたり、役割を果たしたりすることに価値を見出す。中には良い意見を出してくれたり、リーダーとして仲間のトラブルの調整役を果たしてくれたり、「俺についてこい」などというような人物もでてくる。5歳・6歳というのは、なかなか凄い。このように、保育士でもちょっと惚れ惚れしてしまうとか、とっても素敵な子供の姿を見た経験のある方は多いと思いますが、それ位、この5歳・6歳は人間性というか、人間的にも核のような、魅力的なものが育ってくるのです。

しかし、最近ここ10~15年、こうした社会的資質を持った子が減ってきていることに保育現場は悩んでいます。クラス・集団の中で、いつも自分中心で、自分の意見を通そうと躍起になる子、いつも一番でなければ気が済まない子、思い通りにならないと、カッとなってすぐに手を出す子が増えてきました。4歳クラスの段階でいろいろな現象が明らかになってきますが、クラスが成立しない、集団保育が難しくなっています。

「どうしてこんな状態になってしまったのでしょうか？」それが今日、私が皆さんに理解していただきたい重要なポイントです。

表の4歳の所、「人との関わり」の段を見てください。黒丸で「●イメージの言語化ができ、そのイメージを共有することができる」と書いてあります。すごいですね、イメージが言語化できる。つまり言葉を通してお互いの思いやイメージを共有できるのです。言語の獲得が、子どもの社会性を育てるのに重要なファクターであり、大事なプロセスでもあります。ちなみに、子供たちの間でトラブルはよく起きますが、言葉が獲得され、相手に自分の思いを伝えられるようになると、トラブルは減少します。

1歳や2歳クラスでは、「かみつき」が起きます。自我意識が大きく育つこの時期、親も保育士もこの年齢の子に対応するのにギリギリ舞いをするのですが、子供自身でもギリギリ舞いをする時期です。マーガレット・マーラーの指摘によると、この時期、競争心や負けたときの悔しさ、自分がないものを持っている相手への妬みや、自分の気に入ったものへの所有欲や独占欲、かってに相手に仕切られたり、侵入されることへの怒りや拒否、テリトリー意識などが発達分化していきます。こうした中でいろいろなトラブルが起きるのですが、言葉を獲得すると、自分の気持ちを抑え、言葉を通して、相手の状況や自分の気持ちを理解することができるようになります。すると「かみつき」が減っていきます。言葉の獲得は非常に重要です。

「ことば」の段で、の発達を見てみましょう。1歳半で言葉の獲得というのがありますね。20語から40語くらいが獲得されます。2歳では300語くらい、3歳では500語から1000語と、一気に語彙を増やし、言葉を使って表現したり、理解したりする能力を高めていきます。3歳の「ことば」の段に「虚構的知性」と書いてありますね。これは「無いもの・見えないものを考える力」と理解してください。現実にはそこには無いけれど、言葉によってそのことを表したり、伝えたり、理解したり、想像したりする力が、3歳には育ってくるのです。

「人との関わり」の段で3歳の所に「●曖昧ながらイメージの共有が出来始める」と書いてあります。3歳くらいで、ようやく言葉を通してコミュニケーションが取れるようになり始めるということです。個々のイメージで遊んでいた段階から仲間との世界が広がっていくのです。

「3歳、4歳、5歳の発達の違い」

ここで3歳、4歳、5歳の発達の違いを説明しましょう。共励保育園では、子供たちがどのように「ことば」を理解していくかという調査を行いました。子どもたちにイソップ物語の「うしとかえる」という話をきかせ、「今の話はどんなだった？」と聞いて、子供たちの言葉を通して子供たちの理解の程度、認識の程度を調査しました。イソップの「うしとかえる」はご存知ですか？お父さんと3匹の子どものカエルが住んでいて、あるとき子供のカエルが野原に遊びに出かけた。そこで大きな牛に出会って非常にびっくりした。いそいで家に飛び帰り、お父さんカエルに報告をする。「お父さん、大変だよ！野原にとっても大きいものがいたよ！」するとお父さんは自分より大きいものと聞いて少々自尊心が傷ついたのか、自分の偉大さを子供たちに示すために無理に自分のお腹を膨らませ、とうとう最後は破裂して死んでしまった、という教訓じみたお話です。

この話を、3・4・5歳に聞かせ、それぞれに「今のお話はどんなおはなしだった？聞かせてみて！」再話をお願いしてみたわけです。

まず、3歳。この年齢に特徴的であったのは、話がいろいろなところへ飛んでいってしまうということです。とくに、お話の中で「パーンとお腹が破裂してしまいました。」というところに強く印象づけられたのでしょう。多くの子が「ぼくんち風船あるもん！」といった具合に、話を自分の連想で広げてというか、勝手な話をするケースが多かったことです。かつて「さんまのスーパーからくりテレビ」の「御長寿早押しクイズ」という番組がありましたが、それと同じように、一つの言葉を切っ掛けに、どんどん話が主題から離れて、というか自分のイメージで話を返していく。最終には下ネタに落ち着くのですが、それを想像していただければ結構だと思います。そんな訳で、3歳児とご老人はとても相性がよいのです。（笑い）

でも、こうした、イメージをきっかけに自分の感じたこと、思ったことへと話を展開させていく力は、相手の話を聞いて、それに応えるような内容を返していく力はまだまだ十分ではないのですが、この連想する力は、一つの事柄を別な事柄へと関連づける力として働き、やがていろいろな概念を獲得するためにとても大切な役割を果たすようになるのです。この年齢における重要な発達の姿なのです。

次に4歳児。4歳は真面目なんですよ（笑）。「どんな話だった？」と聞くと、「むかし、あるところに・・・」というように、物語の最初から最後まで話を丁寧に再現しようとしています。多分、4歳児というのは、世の中の仕組みを自分の中に取り入れようとしているのではないかと思います。3歳児の直感・連想的な段階から、自分が見たもの、経験したものの仕組みのようなものが見えてくる。それがどのようなものであるかを自分の中に取り入れようとするときに、何らかの基準や価値を手立てとする。そうした段階に入っていく年齢だと思います。4歳児はいろいろな物事を受け止めるのに一つの基準を求めている、自分が判断する基準を求めている時期ではないかと思います。ですから、世の中はこうですよと規範を伝えるには、とても良い時期です。

正月休みの前、園児たちに脳内のネットワークが描かれた図を見せて、「ゲームはいけません。脳の中はこのようにいろいろな配線でつながっているけど、ゲームをすると、ゲームの悪魔がハサミを持って現われる。みんなの頭の中の配線をチョキチョキ切ってしまうんだ。」と話しました。その話を聞いた4歳児は、話の後に私のソバに寄ってきて、「理事長先生、僕はゲームを止めました！」と確かな決意を持って私に話してくれます。これほど4歳児は真面目です。かの哲学者ショーペンハウエルもこう言っています「子供に、嘘だろうが本当のことだろうが、心を込めて、真剣に繰り返し、繰り返し話すと、子供はそのことを信じる」と。4歳児になると、助詞や助動詞、接続詞など、日本語のきまりに沿った話し方を獲得していきます。まさに、仕組みや規範を受け入れている時期と言えるでしょう。

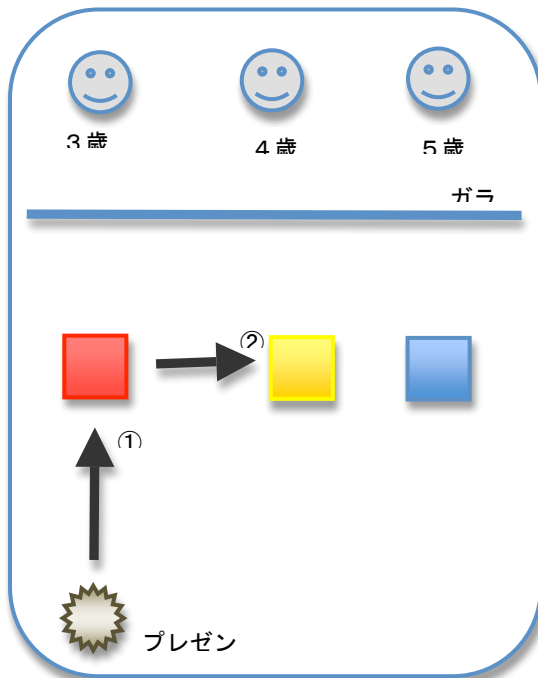
さて、5歳児。5歳児はなんて答えてくれたと思います？「カエルのお父さん馬鹿じゃないの？」と。（笑）つまり、物語の粗筋から見えてくる意味や価値を理解できるようになるのです。発達の表の6歳児の「人との関わり」と「自分づくり」のところに「自分自身を意味や価値の世界に従属させるようになる」と書いてありますが、これはヴィゴツキーの言葉です。だんだん人の心の裏側が見えてくる時期です。物事の表面の裏側、本質を掴む力が出てくるのです。

☆ バロン・コーヘンの実験「他人の気持ちの理解」

加えて、3・4・5歳児の認識の発達の違いを理解するのに、バロン・コーヘンの実験が助けになります。

左図のような、部屋の左側には赤・黄・青の3つの箱が置かれています。ガラス窓で仕切られた右側の部屋には、子供がいて、ガラス越しに3つの箱に起きる出来事を見えています。調査は3・4・5歳児に行いました。

子供たちが箱を見ていると、部屋に、ある人が入ってきて、「赤」の箱の中にプレゼントを入れます。そして、その人は部屋の外へ出て行きます。すると、別の人が入ってきて、前の人が入れた「赤」の箱からプレゼントを取り出し、「黄」の箱に移し替えて出て行ってしまいます。しばらくすると、一番最初の人がプレゼントを取りにもどってきました。



さて、ここで質問です。「この人は何色の箱の中を探すでしょうか？」という実験です。

結果ですが、3・4歳児は間違いなく「黄！！」といます。何故か？それはプレゼントは黄色の箱に入っているからです。つまり自分の知っていること、自分を基準にして判断しているからです。まだまだ相手気持ちや相手の立場に立って考えることは難しいようです。

ところが、5歳児は「あの人は「赤い箱」を探すだろう」と答えます。つまり、相手の立場に立って考えることができるようになります。ですから、5歳児は侮れないのですよ。保育士の心の内などは、しっ

かり理解しています。私は、保護者に「夜9時からのトレンドドラマを5歳児と一緒に見てはいけません。恋の手練手管からいじめの作法まで、すっかり学んでしまいますよ！」と忠告をしていますが、5歳児はそれほどすごいのです。（笑）。

さて、本題にはいります。最近、こういう発達をする3・4・5歳児の姿が見られなくなってきた。と、いうか子供の社会的力がとても落ちてきたということに気付いています。発達の表の「自分づくり」の項目3歳半から4歳半のところに「他者を受け入れる自我（気持ち）と、自己主張の矛盾増大」と書いてあります。言葉を獲得した子供たちは、ルールなどを手がかりにして友達との世界を広げていきますが、それがどうもうまくいかない。5歳児になれば、相手の気持ちや立場なども、言葉やルールを通してなんとか調整していく力が育ってくるものですが、4歳児・5歳児の集団でトラブルが続出というか、相手とうまくやれない子が非常に多くなっているのです。「社会的な自我」が育っていないのです。

では、どうしてそうってしまったのか？これが今回のお話の重要なポイントです。

表の「自分づくり」18ヶ月の所を見てください。「自我」と書いてあります。「自我が雨後のタケノコのようにニョキニョキ生えてくる」とあります。この「自我」というのは、「パッション」です。「生きる力」です。時には大好きな母親を敵にしてまでも自分の主張を通そうとする。主張が通らないとひっくり返って泣き叫ぶ、など、結構大変な状況が起こります。

この時期には、競争心や負けたときの悔しさ、自分がないものを持っている相手への妬みや、自分の気に入ったものへの所有欲や独占欲、かってに相手に仕切られたり、侵入されることへの怒りや拒否、テリトリー意識などが発達分化していきます。母親や保育士も「キレ」るような状況に追い込まれるほど、この自我は強烈です。しかし、この時期の葛藤を親や周囲がどれくらい、その子の身になって受け止めることができるかにより、その子の人格構造の土台が良くも悪くもなる、とマーガレット・マール

一は言っています。世界乳幼児精神学会の渡辺久子先生などは、「この自我が十分育っていないと、思春期には心が生煮えになり、必ず将来悩む」と言い切っているくらいです。

引きこもりとか、コミュニケーションが取れないとか、リストカットとか、子供たちの心の異変については、たくさん指摘されていますし、身近な人にそのようなことが起きている人も多くなっていますから、この問題について、真剣に考える必要があるでしょう。

表の「自我」の上の所を見てください。「自分の気持ちが受け入れられたという体験が、他人の気持ちを察することができるようになる。」と書いてあります。「ああ、そうなんだ、〇〇したかったんだ！」とか「これが、欲しかったんだ」とか、一度「自我」の出所である子供の要求を受け止め、言葉で返してあげる。これが非常に大切で、仮にその要求が叶わないものであったら、「でもね、これは誰々ちゃんのものだから、あなたのものではないのよ。代わりにこっちのおモチャはどうかしら？」と切り返してあげる。

つまり、こうしたやりとりを通して、子供は相手の気持ちを察する力を育てていくのです。もう少し表の上を見ると、「大好きな人の言うことがルールとして育っていく」と書いてありますね。大好きなお母さんが「いけません」と言うから、諦める。大好きなお母さんが悲しむから、自分の気持ちを抑える。そうしたお母さんとの関わりを通して、自分をコントロールする力や、相手と何とか調整していく力を育てていくのです。

3歳・4歳における「他者を受け入れる自我と自己主張の矛盾増大」というのは、こうしたお母さんとの関わりを支えにしながら、子供は他人と関わる力、社会性を育てていくのです。ですから、この自我が強烈に出る時期、昔で言えば「三つ子の魂百までも」の時期ですが、この時期がいかに大切かを昔から言い伝えているということ、改めて認識する必要があると思います。

そこで、母親や保育士が、十分子供の気持ちを受け入れてあげるという対応が大切になってくるのです。自分の気持ちが受け入れられたと感じた子供は「コクン」と頷き、気持ちを切り替え、次の段階へと進んでいきます。

もちろんこの自我に対応するには、簡単に事が運ぶわけではありません。それこそ子供との対決として真剣勝負などということもあるわけです。

しかし、子供の方も、いつまでも駄々をこねている段階で留まってはなりません。一度経験した中から、次の道を探る力は十分備わってきます。1歳半ごろからは、二つの選択を提示してあげると、ダダコネを切り上げ、どちらか一つの方を選択して、自分の気持ちを切り替え、次のステップへと進んでいきます。

「忙しすぎるお母さん」

ところが、この強烈な自我に十分対応してあげるだけの余裕と時間がお母さんに無い。そのことが大きな問題なのです。お母さんが忙しすぎるのです。

子供たちは、世界一大好きなお母さんに、「依存し反抗」しながら、自我を築き上げていきます。先ほどの「保育園のパラドックス」の右下の心の穴のところに記述されていますが、まずお母さんに依存できることが大切。そのお母さんとの信頼関係を土台にして自我（自分）を出していく、ということです。つまり依存ができなければ反抗もできないということになります。

そのお母さんが忙しい。仕事優先。時には、自分優先という傾向が強くなっている。ですから、子供が自分の自我を十分出すことができなくなる、ここが問題だと思います。

最近、この自我を十分出さない子が多くなっている気がします。こうした子は、非常にお母さんに気を遣っています。お母さんを手間取らせない。いわゆる「いい子」を演じるようになってきているのですが、お母さんも必要以上によい子であることを子供に要求する傾向があります。

中には、子供を小さいうちから集団に預けると社会性が育つと勘違いされているお母さんが多くなっているという感じがします。これは大きな勘違いです。これまでお話してきてお分かりだと思いますが、012歳児の間の母子関係、特に大好きなお母さんにいつも支えられているという安心感や安全感が刻まれないと、子供は他の人間に対する信頼感も持てなくなりますから、こうした勘違いは早くお母さんたちに伝える必要があると思います。

もともと待機児問題があり、生活の問題があることは十分理解しているのですが、子供が保育園に入園できないということになると仕事ができないという心配があるためか、焦ってしまう方も多いたと思います。

中には、0歳の入園前の段階から「保育に欠ける」という状況を意図的に作りあげ、入園のポイントを上げるというようなお母さんの対応も出てきました。子供より仕事優先される。保育園に入園させるために、自分の大切な子を未認可施設やベビーホテルなどに預け、入園のポイントを上げるということは、本末転倒というか、子供が安易に預けられたときの心の状況、知らないところへ突然預けられ、大好きなお母さんと別れ別れになる不安を想像してみる必要があります。何が脳に刻み込まれるのでしょうか。

平成10年に厚生白書が発行され、その中で「三歳児神話は神話にすぎない」と当時の室長である椋野美智子さんが書きました。その年を切っ掛けにして子供を保育園に預ける親が急増しました。しかも012歳児の子供が多く預けられるようになりました。この厚生白書でテーマにしたのは、三歳児神話ですが、1992年の国立社会保障・人口問題研究所の調査では、「少なくとも子供が小さいうちは自分の手で育てたい」と思う母親が89%もいました。ほとんど9割の母親がそう思っていた。ところがこの厚生白書が出た後は、一気にそう思う母親が減ったということです。2004年の調査のときには、74%にまで減っていますから、012歳の子供たちを預けるようする母親が一気に増えたわけです。保育所が足りなくなるわけです。自然界の法則ではシェアが70%を切ると、一気に40%台まで落ち込むと言われています。ほとんどの012歳児が保育園やその他の保育施設に預けられるようになるというこ

とは、何を意味するのでしょうか。真剣に考えないと、大変なことになると私は思うのです。

ソビエトも、中国もイスラエルも子供を社会で育てようとして失敗している。なぜそれを日本でやろうとしているのか、私は不思議でなりません。椋野さんには、責任を取ってもらいたいと本当に思っています。

余談ですが、保護者の方には、入園時に、「今の皆さんの年齢に40年を加えてください。」とお話します。すると、子供たちは40歳から45歳、親たちは70歳から75歳にもなりますか。「そうなったら、皆さんは逆に子供たちから、さっさと施設に預けられてしまいますよ！」「八王子の山奥にはそうした施設がたくさんあり、だれも面会に来ない老人でいっぱいですよ！」とお話します。

さて話を戻しますが、私が強く指摘したいのは、この自我が育つ人間の発達において非常に大切な時期に、お母さんが十分な時間と余裕を持って、子供に対応することをしていないのではないかと、ということです。それが、子供の心をいらだたせたり、不安にさせたり、生煮えにしてしまうという現象を引き起こしているのではないかと、思うのです。こうした子供の問題が、実際に保育士が保育現場で悩む問題として広がっていくのです。現実には我が園の2歳児3歳児にそのような傾向が見えることは確かです。

それを解決するのは、会社の社長さんしかありません。働き方を見直してもらいしかありません。「家族が成り立つ働き方」が実現されるようにならなければ問題は解決しないでしょう。ところが、子供が病気で休み続けると会社を首になってしまう、育休を取って復帰しようとしたら解雇されたとかいうようなケースが多くあると聞いています。こうした社長さんには、子供がきちんと育てられなければ、やがてご自分の会社も人材で困ることになるでしょう。と伝える必要があります。現在、私は会社の支店長さんとか、お母さんを雇う上司の方に、皆さんにお配りした、「保育園のパラドックス」と「子供の発達を表」を説明して歩いています。先日、商工会議所の会頭さんに説明しましたところ、考えても見なかったと驚かされていました。そうした日本の社会情勢ですが、デンマークとまではいなくても、日本でそうした問題を解決している会社があります。未来工業などという会社は、社員に残業はありませんし、社員を大切にしているそうです。やろうとすれば日本でもできることを証明しています。要はリーダーの心持ち次第でしょう。

さあ、この図の説明も最後になります。18ヶ月をもう少し遡って、もう少し左、6ヶ月のあたりを見ていきましょう。「基本的信頼感」と書いてありますね。これはエリクソンが言っています。1歳半頃から強烈な自我が芽生えますが、その自我が十分育つようにするには、それを支える「基本的信頼感」というのが母子間に構築されなくてはなりません。パラドックスの図にもありますが、大好きな母親に「依存し、反抗する」ということで、依存ができるような信頼関係ができていないと、反抗することもできない。子供がこの人に無理難題をふっかけても、けっして反対に攻撃されるようなことは無いというような確信が、心の中になれば、相手に我が儘は言えませんよね。うっかり我が儘したら、ひっぱたかれた、などということが起こるとすれば、子供はそのような我が儘は出さなくなりますね。反抗もできなくなります。つま

り、母子間の信頼関係ができていないと、子供は自我をぶつけることができなくなるということです。

その「基本的信頼感」というのは、生まれて、お腹が減ったらおっぱいをもらう。オムツが濡れて気持ち悪くなったら、オムツを交換してもらう。不快な状況から快適・さっぱりという状況に改善してもらう。このような心地よさが繰り返されることによって赤ちゃんとお母さんとの間に強い信頼関係ができます。子供の脳に、この人と一緒に安心であり、安全であるということが刻み込まれると、「この人でなくてはダメ」というように、強い愛着関係が築かれます。そうすると、人見知りや後追いが始まります。その愛着関係を土台にして、安心感・安全感を感じながら子供は強烈な自我を出し、自分づくりを始めるのです。

ですから、この愛着関係が強くなければ、次の自我の出方も十分でなくなるというわけです。いや、愛着関係の程度に応じて自我の強さは、大きくも小さくもなるという訳です。

よく、この子は親想いのいい子だったとか、人見知りもしない、いい子だとか言われることがあります。これらは、どちらかという親の手間をかけさせないという意味で「いい子」ですが、愛着関係がしっかり築かれていれば問題はないのですが、子供の方が親との関わりを諦めてしまっているのではないかと心配するような子も出てきており、そうした場合には、親に子供の心の状況を正しく伝える必要があるのではないかと思います。

「まとめ」

ではこれまでの話をまとめてみましょう。子供は、その発達の特徴として、345歳で人と関わる力、社会的自我が育ってくるのですが、どうもそれがうまく育っていない。保育園における子供たちのトラブルの原因に、相手のことを考えたり、察したりする力が育っていないということがあつた。その原因はどこにあるかと探ると、どうも1歳半から3歳頃までの自我の育ちに問題がある。

子供の自我は、それを支えてくれる母親との関わりの中で育つが、強烈な自我に、母親が十分対応できていない。この時期の葛藤を親や周囲がどれくらい、その子の身になって受け止めることができるかにかかっているが、親が仕事や自分のことで忙しく子供との時間がとれていない。また、子供は早くから保育園に預けておけば社会性が育つと勘違いをしている親もいる。

子供の自我は、母親との基本的信頼感によって支えられて初めて育つ。大好きな母親に依存し、反抗しながら自我を育てるが、その母親との信頼感が希薄だと、自我も生煮えになる恐れがある。

こうした問題を解決するには、親が012歳の時期に十分関わるができる余裕と時間を社会が保障することである。デンマークはその事を早くから気付き、社会の仕組みを変えてきた。日本も会社の社長さんが気付けば可能性がでてくる。日本の会社の中には、残業も無く社員を大事にする会社もあり、やればできるようだ。行政は何をするか？会社の社長さんのことばかりを聞いているだけではなく、施策を担当す

る者として、もっとすべき事はあると思います。

最後に保育園の真の役割を確認しておきたいと思います。保育園の真の役割とは、「子供の成長を通し、親が幸せや喜びを感じ、親としての役割の大切さを学んでいきながら、親として育っていく。」親が親の役目を果たせるように支援する。これが真の子育て支援だと、私は思います。

